

05.

関西

関西地方会

平井都始子

(奈良県立医科大学中央内視鏡・超音波部)

成り立ち

1990年当時、本学会理事会において地方会設立に関する構想が浮上していた。担当理事であられた渡邊決先生（関西地方会名誉運営委員）は、関西地区において指導的立場で活躍されていた横井浩先生（関西地方会名誉運営委員）に関西地方会の組織づくりを託された。横井浩先生は地方会検討委員会委員として実際に関西地方会の立案から実現にいたるまでの諸作業を担当され、全国にさきがけて関西地方会を組織化され、1991年2月23日に初代関西地方会運営委員長として第1回関西地方会を大阪で開催された。当時から関西地区には、各領域にはほぼ均等に本学会で活躍している専門家がおられ、世代的にも長老から若手までよくバランスがそろっており、しかも領域にとらわれずお互い仲が良く、地方会を創設するのに最適な環境が用意されていたと思われる。本学会の主題を先取りした「各科領域のカラードプラ断層法の現況と将来」と題したシンポジウムは大好評、一般演題は75題が集まり、参加者も420名と大成功裡に終了、その後全国の地方会立ち上げのモデルとなった。

活動

現在関西地方会は、地域と専門領域を考慮して選出された運営委員会（名誉運営委員を含めて現在66名）により運営している。運営委員の15名が本学会理事（または理事経験者）を、17名が

評議員を拝命しており、運営は本学会との連携のもとに行われている。関西地方会事務所は発足当初より京都府立医科大学泌尿器科に設置されてきたが、2011年4月から奈良県立医科大学付属病院中央内視鏡・超音波部に移行し現在に至っている。大江宏先生（関西地方会名誉運営委員）には長期にわたり事務所として尽力いただいた。第1回関西地方会を開催後、2007年まで春と秋の年2回大阪と大阪以外の府県を交互に開催してきた。バブル崩壊後協賛金や広告料などの収入が激減し、参加費を据え置きのみでは年2回の開催が困難であるなどの理由で、2008年からは秋に年1回の開催となり、今年秋には第39回目の開催予定である。関西地方会では、どの府県の県庁所在地から1時間程度で大阪に到着できるという恵まれた環境で、土曜日1日の開催で充実したプログラムが企画されてきた。開催地は交通の便が良く会員数の多い大阪が20回と最も多いが、神戸、姫路、京都、奈良、和歌山、大津などでの開催は、地域の研修医や検査技師が参加しやすく、各府県の超音波学会会員の増加に寄与してきた。また、前述したように関西地方会には全ての領域に本学会で活躍されている先生方がおられるのが大きな特徴で、大会長が各領域の特徴を生かした特別企画や教育セッションを組んで、レベルの高い講演や討論がなされるだけでなく、領域横断のシンポジウムなども企画され、専門外の領域での超音波の新知見についての勉強ができ、関西地方会の活性化やひいては超音波医学の発展に役立ってきたと思われる。参加者数は、第1回は420名であったが、

年々増加して8年後に大阪で開催された第16回には801名と倍増した。そして第24回から講習会を併設開催することになり、第25回には参加者が1000名を超えた。最近では、毎回5会場で1000人を超える規模になっている。関西地方会の会員数も1990年には2464名であったが、地方会の開催とともに1995年度には3320名まで増加した。その後2007年度末には2923名まで減少したが、最近徐々に増加して2011年末では3044名となっている。

現状と将来

地方会開始当初は運営委員も40歳代が中心であったが、その発展と成熟に伴い、最近運営委員の中心は50歳代と高齢化している。一時減少した会員数は最近また増加に転じているが、若手医師の学会参加が少なく、今後超音波医学に興味を持つ若い医師育成への取り組みが地方会レベルでも必要と考えている。また、現在関西地方会の正会員1622名、準会員1422名であり、地方会参加者も検査技師が多い。今後の発展には、装置の進歩とともに医師、技師の連携が重要である。腹部領域の指導検査士認定制度が開始されることもあり、地方会運営に技師の参加を検討する必要がある。